



足軽が制作した鐔 喜多河宗典一派の活動

鐔は刀の装具の一つです。刀身と柄の境に装着することで刀の重心を整え、柄を握る手が滑ることを防ぐ重要な役割を担っています。

鐔の制作は、室町時代前期頃までは、甲冑師や刀匠が余技的に行っていたとされますが、室町時代中期には鐔専門の金工が現れ、時代が進むにつれ、多様な需要層の嗜好を反映して、多彩な意匠が追求されました。桃山時代には多くの名工が輩出し、鐔の芸術性は一挙に高まりをみせます。江戸時代に入ると、諸派が各地で



写真1 鉄地金覆輪唐人物透鐔 (当館蔵)



写真2 同表面上部



写真3 同表銘「藻柄子 吉川益胤」

実は、この度の寄贈に際した調査で、吉川仙之介家の六代当主平右衛門(？)一八五〇)の戒名が、「宗典齋益胤胤生居士」であったことが判明しました。戒名に含まれる「宗典

生まれしました。彦根でも、江戸時代中期に、喜多河宗典を祖とする鐔師の一派が生まれ、彦根彫と呼ばれる濃密な高彫意匠で一世を風靡しました。

喜多河宗典は藻柄子と号し、作品の銘記から、彦根の中藪に居を構えて制作したと考えられています。宗典に近い作風を示す別人の在銘作も複数確認されており、その中には、「彦根住」と併記したのもあることから、宗典の弟子たちも彦根で活動し、一派を成していたと考えられます。

写真の鐔は、宗典一派の活動の一端をうかがわせる作品です。彦根藩の足軽であった吉川仙之介家に伝来したもので、令和六年(二〇二四)十二月に当館へ寄贈されました。

この鐔は、鉄地に唐人人物が透彫で表されています。高彫の技法で形態を浮き上がらせ、さらに色絵の技法で金色と素銅色の彩りが加えられています。表に「藻柄子吉川益胤」、裏に「江州彦根住」と銘が切られており、彦根に住し、喜多河宗典と同じく「藻柄子」を名乗った吉川益胤なる人物の作品であることが示されています。

齋」と「益」、「胤」の語は、作品の銘記と強い相関関係を感じさせ、この平右衛門こそが、この鐔を制作した吉川益胤本人であった可能性を示しています。鐔に見られる、いかにも宗典派らしい高彫と色絵を駆使した作風からも、益胤が宗典ゆかりの鐔師であったことが推測されます。宗典派の鐔師に足軽がいた可能性を示す貴重な発見といえます。

吉川益胤銘の作品は本品の他にも複数知られており、益胤が鐔師として一定の活動をしていたことが分かります。体系立てた研究が未だされておらず、不明な点も多い喜多河宗典一派ですが、本品が確認されたことにより、彼らの作風や技術、門派の実態の一端が具体的に明らかになる研究の糸口が提示されたといえるでしょう。

【彦根城博物館 奥田 晶子】

写真の作品は、テーマ展「鐔とりどり―技巧と意匠の粋―」で4月20日(月)まで展示します(会期中無休)。